

日本小児科学会こどもの生活環境改善委員会

Injury Alert (傷害速報)

No. 130 ウサギ咬傷が疑われた指の欠損

事例	基本情報	年齢：0歳11か月 性別：女児 体重：5.5 kg 身長：60.5 cm
	家族構成	母(29歳), 兄(4歳), 姉(5歳)
	発達・既往歴	大動脈弁狭窄症, 低出生体重児, SGA, 体重増加不良, 先天性甲状腺機能低下症, 小頭症
臨床診断名		動物咬傷, 左示指挫滅創, 左示指末節骨開放骨折
医療費		入院 542,820円
原因対象	対象名称	ウサギ
	入手経路 使用状況	ウサギは知人から譲り受けたものであった。自宅でペットとして室内, 床に置いたゲージ(図3)に入れ飼育していた。
発生状況	発生場所	自宅寝室。普段より寝室にゲージを置きその中で飼育していた。
	周囲の人 周囲の環境	本児のみが寝室で寝ており, 口元にミルクを入れた哺乳瓶を置き, 母はリビングで休憩していた。きょうだいは保育園に行っていた。また, ウサギの餌は普段は母が与えていた。母に知的障害があり, 母自身がヘルパーなどを利用していた。経済的にも困窮している家庭であった。また本児は体重増加不良などがあり, マルトリートメントが疑われていた。
	発生年月日	2022年10月X日(木) 午後2時55分
	発生時の 詳しい様子 受診までの経緯	母はリビング, 本児は口元に哺乳瓶が置かれた状態で寝室にいた。上記時間に母が兄の異常な啼泣を聞き見に行くと, 寝室内でウサギのゲージに指を入れて啼泣している本児を発見。左示指が欠損し, 出血していた(本児の体格は月齢に比して小さいが, 手の大きさは月齢相当でゲージの隙間には入る程度であったと投稿者より報告されている)。母は救急要請する手段がなかったため, 居住するマンション1階の住民に助けを求めた。その住民により救急要請され, A医療機関へ搬送された。
医療機関受診時 以降の治療経過 転帰	呼吸, 循環は安定していた。左示指爪部分が欠損(図1)(ウサギが食べたと推測され欠損部持参なし)し, 爪根部は残存しておらず, 末節骨断端が露出していた。圧迫で制御できる出血があった。その他の損傷はなかった。X線写真(図2)で末節骨先端が欠損していることを確認し, 生理食塩水で洗浄, リドカインで指神経ブロック, バイポーラで止血しアルギン酸塩を貼付, 包帯保護を行った。創部自体は外来加療が可能な損傷であったが, 地域保健師介入中の事例であり, 家庭内での重大事故のため環境調整目的に同日一般病棟に入院となった。X+3日目には形成外科が創部処置を行い, 感染徴候はなかった。X+5日目病院内こども虐待対応チームや虐待委員会で事実を十分に検証され, 虐待の可能性は低いと判断した。しかし, 適切な養育及び安全な創部管理が担保できるよう, 児童相談所に通告となった。X+8日目に創部経過は良好で外来移行として乳児院へ退院となった。その後の本児の健全な成長をサポートできるように, 地域全体で家族を支援していく方針である。	
キーワード	ウサギ, 動物咬傷, 手指欠損	

【こどもの生活環境改善委員会からのコメント】

- 過去には, 米国のカリフォルニア州ロサンゼルスで, 2009年から2011年の3年間で26,169件の動物咬傷¹⁾の報告がある。この文献では, 犬咬傷が23,103件(88%)と多くを占め, ついで猫咬傷が多く, ウサギなどのげっ歯類やその他の哺乳類による咬傷は稀であった。0~4歳の子どもは8%(n=2,007)と全年齢層別の割合は少なく, 発生場所は屋外やレクリエーション活動中が多かった。負傷部位は手が35%(n=9,130)と最多で, 入院は1%(n=267)であった。本邦の疫学情報としては, 毎年4,000件を超える犬咬傷の報告がある²⁾が, 犬以外の咬傷³⁾は令和3年度で27件となっており実態は把握されていないと思われる。
- 日本におけるペットの飼育数は2010年に内閣府が実施した「動物愛護に関する世論調査」⁴⁾では666件の調査対象について, 犬(58.6%), 猫(30.9%), 魚類(19.4%), 鳥類(5.7%), 昆虫類(3.6%)に次いで, ウサギは3.3%であった。1990年代以降, 都市型のライフスタイルに合ったウサギやハムスター, 爬虫類などの小動物飼育が増加しているとされている。
- 消費者庁の事故情報データベースシステム⁵⁾で「ウサギ」で検索すると, ウサギによる咬傷が3事例表示され, いずれも保育園で手指をウサギ小屋の金網に入れてしまったことによるものであった。そのうち2事例は本症例と同様の切断事例であった。医中誌やPubMed検索ではウサギ, げっ歯類に焦点を

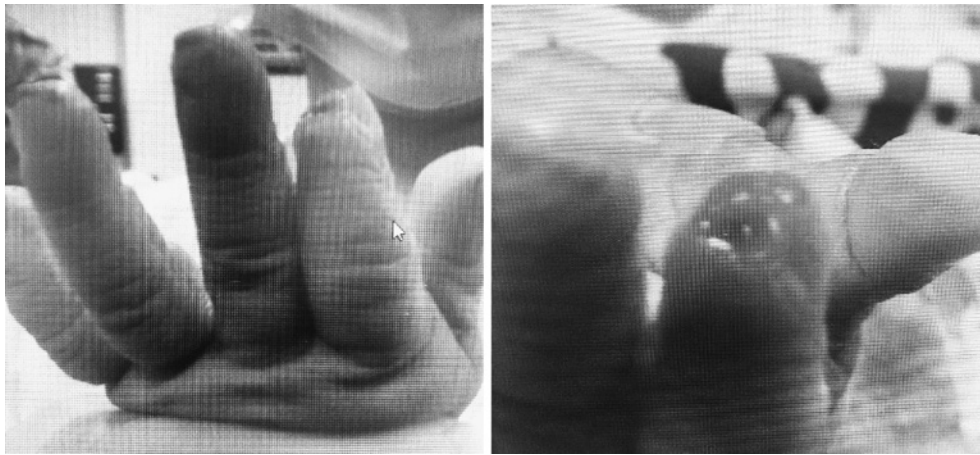


図1 (来院時) 左示指爪部以遠が欠損していた。活動性出血はなかった。



図2 先端が欠損した左手示指の X 線写真 (側面像)



図3 ゲージにいるウサギ

絞った咬傷の文献は見つけられなかった。

4. ウサギの歯は常生歯であり、一生伸び続け、「齧(かじ)る」ことが習性である⁶⁾。ウサギは他のげっ歯類と同様、狂犬病のリスクは少なく、感染のリスクも高くない⁷⁾。ウサギに関する獣医師監修の記事が掲載されている“うさぎタイムズ”⁸⁾によると、ウサギの性格にも個体差があり、「人間と同じように、全く同じ性格のうさぎさんはいません。臆病だったり好奇心旺盛だったり、個体差があります」と記載があり、一律のしつけ方法を提示するのは難しい可能性がある。
5. 1歳児において指サイズの平均値は幅9.1 mm, 厚さ7.4 mmと報告がある⁹⁾。インターネットで「ウサギ」「ゲージ」で検索し出てくる商品は、詳細な記載はないが、いずれも乳幼児の指は容易に隙間から通ると推測される程度のもので大半である。
6. 予防策としては、犬に対して挙げられている予防策⁸⁾¹⁰⁾を参考とし、下記を挙げる。
 - ① ゲージを子どもの指が入らない網目のものにする。
 - ② 子どもがゲージの周囲に近づかないよう安全柵を設置する。
 - ③ 幼い子どもをペットと二人きりにさせない。
 - ④ 離れるときは子どもを別の部屋へ移動し、ペットのいる部屋を施錠する。
 - ⑤ 理解可能な年齢の子どもにはペットとの過ごし方・注意点を教える。
 - ⑥ ウサギの個体の性質を理解した飼育を行い、ウサギが落ち着いて過ごせる環境を整える。

参考文献

- 1) Lyu C, Jewell MP, Piron J, et al. Public Health Rep. Burden of Bites by Dogs and Other Animals in Los Angeles County, California, 2009-2011. 2016 ; 131 : 800-8.
- 2) “犬による咬傷事故状況”. 環境小動物愛護管理室. https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/files/r04/2_3_1.pdf, (参照 2023-6-29)
- 3) “犬以外の動物による人身事故状況”. 環境省動物愛護管理室. https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/files/r04/2_3_3.pdf, (参照 2023-6-29)
- 4) “動物愛護に関する世論調査”. 内閣府. <https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-doubutu/2-1.html>, (参照 2023-3-7)
- 5) 消費者庁. 事故情報データベースシステム. <https://www.jikojoho.caa.go.jp/ai-national/>, (参照 2023-3-7)
- 6) “うさぎとの暮らし”. GEX. <https://www.gex-fp.co.jp/animal/breed/rabbit/living/> (参照 2023-3-8)
- 7) “Rabies, Domestic Animals” Centers for Disease Control and Prevention. <https://www.cdc.gov/rabies/exposure/animals/domestic.html> (参照 2023-3-29)
- 8) “うさぎタイムズ うさぎの特徴と生態・習性について | 飼う前に知りたいこと”. https://www.ferret-link.com/usagitimes/kind/#人間にはなつくの?_うさぎの性格と知能は? (参照 2023-3-29)
- 9) 八藤後猛. バイオメカニズム学会誌. 子どもの発達と住居内安全計画. 2009 ; 33 : 8-15.
- 10) Rothe K, Tsokos M, Handrick W. Animal and Human Bite Wounds. Deutsches Ärzteblatt international [Internet]. 2015 Jun 19 [cited 2023 Jan 30]; Available from : <https://www.aerzteblatt.de/10.3238/arztebl.2015.0433>